

研究・調査報告書

報告書番号	担当
3 9 7	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)	
The joint association of average volume of alcohol and binge drinking with hazardous driving behaviour and traffic crashes. 飲酒量と一回あたり大量飲酒との複合的影響と危険運転や交通事故との関連	
執筆者	
Valencia-Martin JL, Galan I, Rodriguez-Artalejo F.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Addiction. 2008 May;103(5):749-57.	
キーワード	
飲酒量・1回あたり多量飲酒・交通事故・交通安全	
要 旨	
<p>背景： 従来の飲酒関連の交通安全についての研究は飲酒量や一回あたり大量飲酒の影響を十分に評価していなかった。</p> <p>目的： 飲酒量と一回あたり大量飲酒との単独および複合の影響と危険運転や交通事故との関連を検討すること。</p> <p>方法： スペインのマドリッド地区で2000～2005年に18～64歳の12037名に対して行った電話インタビューの情報を用いた。多量飲酒の基準は1日あたり40g(男性)／24g(女性)とした。1回あたり大量飲酒の定義は調査時前1カ月以内の80g(男性)／60g(女性)の飲酒とした。対象者は以下の群に分類された：(1)非飲酒者、(2)1回あたり大量飲酒を伴わない中等量飲酒者、(3)1回あたり大量飲酒を伴う中等量飲酒者、(4)1回あたり大量飲酒を伴わない多量飲酒者、(5)1回あたり大量飲酒を伴う多量飲酒者。性・年齢・学歴を調整してロジスティック回帰分析を行った。</p> <p>結果： シートベルト非着用頻度は上記の飲酒カテゴリーが上がるると有意に上昇し、(1)の群を対照としたオッズ比は、1、1.19、1.69、1.68、2.41であった。(2)の群と比較すると、飲酒運転は(3)、(4)、(5)の群で頻度が高く、そのオッズ比は7.43、7.31、15.50であった。また、飲酒カテゴリーが上がるごとに交通事故の危険度も上昇した。(1)を対照とすると(5)のオッズ比は2.01であった。</p> <p>結論： 自己申告による飲酒量・1回あたり多量飲酒は何れも自己申告による危険運転習慣および交通事故と関連があった。この関連は飲酒カテゴリーが上昇するほど大きくなった。</p>	